

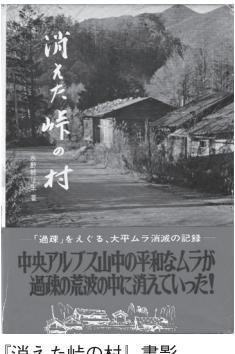
『消えた峠の村』(水野都沚生・著)

——大平宿を例に過疎問題を訴える
高柳俊男
(法政大学国際文化学部教授)

『稲穂』の前号で、「伊那谷関連書の書評や紹介のコ一ナーがあつたら」と希望を綴ったところ、「まず隗より始めよ」で、自分が書くことになった。

大平宿の成り立ちから廃村まで

ここでは、「人類の記録シリーズ」の一冊として出版された、水野都沚生著『消えた峠の村』(1972年)をご紹介したい。刊行年から推測されるように、「消えた峠の村」とは、飯田から木曽に抜ける街道筋にあつた大平宿のこと。古くから交通の要衝に位置し、炭焼きなどの山仕事で生計を立ててきた集落だ。しかし、高地の厳しい



『消えた峠の村』書影



●たかやなぎ・としお
1956年生まれ。栃木県出身。
専門は朝鮮近現代史、とくに在日する人々の歴史・文化や、日本と朝鮮半島間の交流・相互認識。コロナで伊那谷に行けない分、オンラインセミナーに軒並み参加して憂さを晴らしている。

環境や高度経済成長の波に押されて、すぐ下の松川入が1966年に廃村になつたのに続いて、1970年11月30日をもつて全住民が集団離村した。

本書は、大平宿の成立から始まつて、平和だった山村が廃村に追い込まれるまでの経緯を事細かに綴つた、ユニークな作品である。発行はポプラ社で、あくまでも児童書だが、地域史や民俗学に造詣の深い水野都沚生氏(1910~77年、飯田中学27回生)が著しただけあって、事実に基づいた丁寧で学術的な記述が光る。関連する写真や挿絵も数多く添えてあり、いま絶版なのが惜しまれるほどである。

中でも印象的なのが、丹念に描かれた子どもたちの姿だ。大平小学校は児童数の減少に伴い、1967年度から丸山小学校の分校に格下げとなり、さらに集団離村の方針が決まるごとに、他地域への移住者が増えて歯抜け状態になる。その中で、最後まで通い続けた麦島家のきょうだいの日常を、愛情を込めて追つている。飯田・下伊那の各高校で教鞭(教科は国語)を取り、歴史を庶民や弱者の視点から見ようとした教師なればこそその内容である。成立事情に関して、大平宿消滅を惜しむ地元民で「大平地区離散調査団」をつくり、寝袋や食料品を持参して、バスも通わない20キロの山奥まで週末ごとに通い続けた、と本書冒頭にある(水野氏の詳しい経歴は、南信州新聞社『伊那谷の民俗学を拓いた人びとⅡ』を参照)。

私と大平宿との不思議な縁

実は、この話には後日談がある。学部の「飯田・下伊那研修」初年度の2012年、満蒙開拓平和記念館を準備(翌年開館)していた寺沢秀文さんが、法政側の教員を「ぎやらりー」へ案内してくれた。セングキシネマズ裏手にある半地下のここは、一時代前のアイドルをはじめ、懐メロの音源を各種取り揃えたディープな飲み屋で、その日もテレビにはアリスの主題歌による映画『帰らざ

る日々』(1978年)がかかっていた。私が「大平宿も出てくるんですよね」と言つたら、隣で飲んでいた3人組の一人から、「私、大平の出身だけど」の声が。「もしや?」と思つて聞くと、大平分校の閉校式で答辞を読み上げた、あの麦島和彦さんだつた。集団移住から40年あまり、かの日の麦島少年が立派に成長して、いま目の前にいるとは!『消えた峠の村』を読んでいた縁がつなぐ麦島さんとの関係は、その後も大事に続いている。

縁といえば、大平宿の廃村後、当地に残る古民家を管理してきたのが、「大平宿をのこす会」の人たちである。会代表の羽場崎清人さんには研修の準備過程でお世話をなつたので、他界後、追悼文集に一文を書く機会を頂戴した。文集は現時点では未刊だが、大平宿には地道な活動を続けた羽場崎さんを讃える碑が完成しているという。次に大平宿を訪れる際には羽場崎清人さんを、そして大平の事例を通して日本の過疎問題に警鐘を鳴らした水野都沚生氏を現地で偲び、想いを新たにしたい。

水野氏らの活動を背景に、大平廃村後、飯田市教育委員会から報告書『大平の民俗―集団移住した飯田市大平部落』が刊行されたのも注目を引く(松川人も)。集落は無くなつても、そこに生きた人々の記録はきちんと残そうという姿勢に、飯田の文化の底力が垣間見える。